週刊「考歴民（これみ）」 Ｎｏ39　2021.12.20

交野古文化同好会

考古・歴史・民俗の頭文字を取って考歴民（これみ）と名付けました。

=東車塚（二次・三次）発掘調査から=

19471(昭和 47).12 月

東車塚古墳(一次)発掘調査で大阪府、水野正好氏(当時:主査)から指導を受ける。

読売新聞

人物クローズアップ Close Up

考古学者　水野正好さん　77

地の至宝 残して生かす

ユーモアを交え、テンポよく一気に話し進める水野節。で、年間240回もの講演をこなす名物考古学者が3月末で大阪府文化財センター加里長を退き、公職から引退した。節目に何を思うのかを尋ねなくて奈良市の占部・元興寺で待ち合わせた。

黒一つなく、雲彼を春の日差しが優しく包んでいた。

「ここが、一番お気に入りなんですよ」と、飛鳥時代の帽材が今も使われている国宝・禅光の概側に腰を下ろす。講演とは違う、静かな口調だ。

大学卒業後、研究所の非常勤職員などを経て、1961年、この墳内で行われた発掘調査に携わった。「あの東門の内側に穴があって、中世の木製品がたくさん出た」。指さす先から出土したのは、骨や歯を納めた木塔や、卒塔婆など4800点。当時、中世は考古学の対象とされていなかった。保存技術も未発達で、木製の遺物は傷むまま放置されていた。

「こんなに珍しいものを何とか残せないか」と、様々な遺品を試み、保存に成功した。それが、文化財科学の一大拠点として名高い「元興寺文化財研究所」の前身に立った。高度経済成長期で、開発によって多くの文化財が無造作に破壊されていた頃である。市民運動の先頭に立って保存を訴える考古学者もいたが、「行政の道を進んだのは「論文を一本書く間に、自分の力でいい」と考えたからだった。

今でこそ名目団体には大学で考古学を学んだ職員がいるが、62年、滋賀県に初任した時、「埋蔵文化財担当は自分一人」と言われた。「大津市」の炭鉱職員住宅の工事現場で瓦が見つかった時は、場所が未確定だった律令時代の近江国府跡だと直感して、すぐに工事を止めて中跡に仮指定するよう国に訴えた。

府教委にいた頃は、難波高跡（大阪市）中枢の地下の遺構保護のために、阪神高速の高架計画の名称を変えた。

原点の地・金剛・正覚寺の境内で、遺構を現地調査を充実して、考古学は市民に「考える」ことを問う（奈良・元興寺）

みずの・まさよし　1934年、大阪市出身。古代から近・現代まで幅広い時代に造詣。古代人の精神性・宗教に研究を知られる。著書に「古代を考える」（広三一天皇陵）（岩波）など。

古墳主体部から出土した筒形銅器などを見て、素晴らしい遺物が出土しましたね。この部分は、これ以上は掘り進めないようにしましょう。

ここは古くから地元の人たちに「車塚」とよばれていました。

小山が子どもたちの遊び場となっていました。

昭和 38 年発刊の「交野町史」に初めて寺村・南川堤古墳として記述された。当古墳は寺村の南、片町線路と南川の交差する西側、堤沿いの小丘である。寺村の入口、八幡宮伏拝のある丘陵地（巽山）から続く標高 40㍍の洪積地の突き出した先端で、全面（西）はゆるやかに下がって、300㍍ばかり向こうに標高 30㍍の天野川低湿地（古代稲作地）の一帯を見下ろしている。南川堤と草川堤との間に田圃から、弥生時代の土器片や土師器片が出土している。

よってこの附近には古代村落が開けていたことが推察されるが、この古墳はその部落の長者を葬ったものだろうか(奥野平次氏)。

高野山にて奥野平次氏(中央の帽子と杖)

「交野町史」より一部引用」

あれから 16 年後の昭和 63 年、この古墳の北側を「緑の道」整備工事に先だって 8 月 22 日より第二次調査が開始された。

西車塚古墳(私有地のため未調査)

東車塚古墳（泉が丘より）

大阪・交野
東車塚古墳

未盗掘で8メートル 2人を埋葬か

副葬品も多数

日本一長い木棺跡

多数の副葬品が埋葬時のままの配置で見つかった割竹形木棺跡（手前が北側）＝交野市寺南野で

1988.11.10　朝日掲載記事

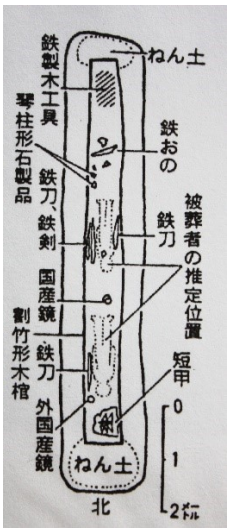
短甲、鏡、鉄刀、勾玉など1000点

副葬品がぞくぞく

大阪・交野の東車塚古墳

合葬の可能性も　肩野物部氏に関連の墓？

1988.11.10　産経新聞掲載

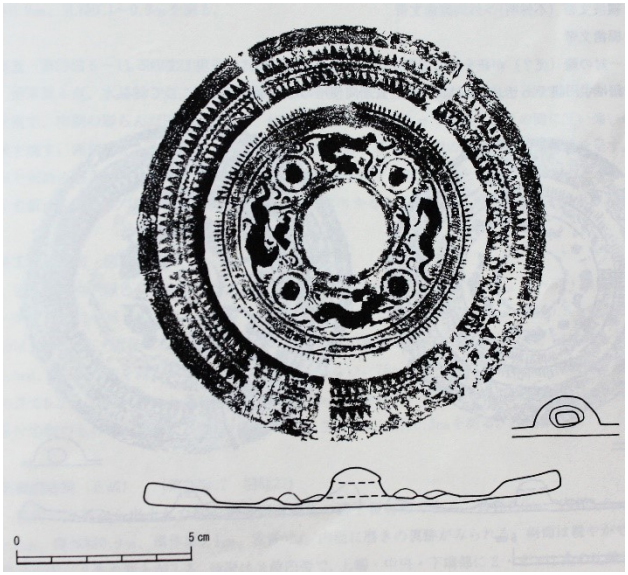


鉄刀と石釧

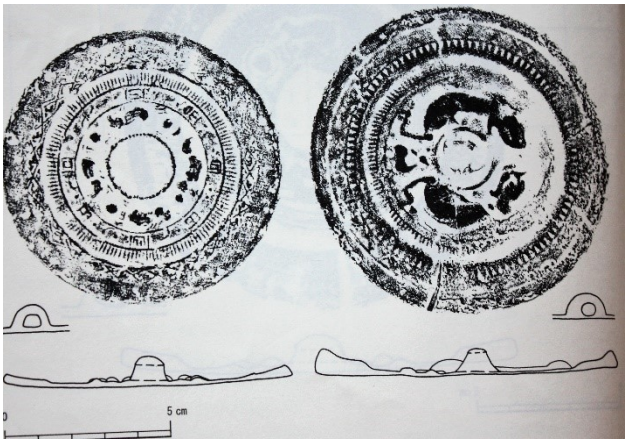
勾玉・管玉・鏡

鉄製農工具

武器・装身具



四乳四獣鏡（船載鏡）



四獣鏡（仿製鏡）拓影　　盤龍鏡（仿製鏡）拓影

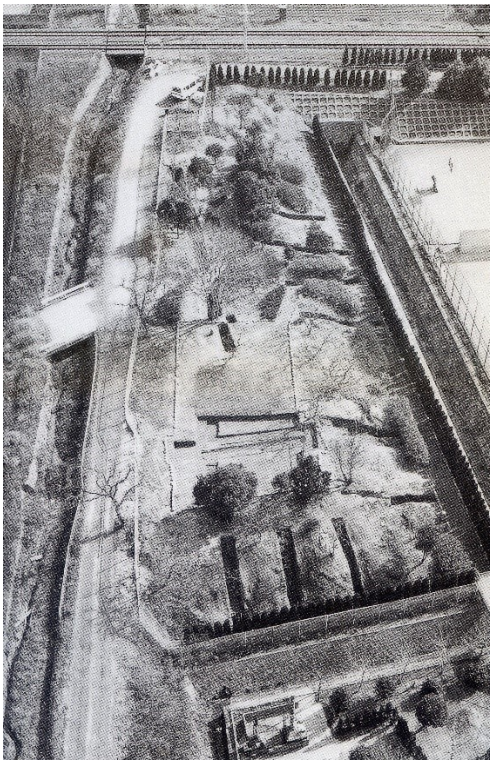
主体部より鏡（3）、装身具（勾玉・石釧・管玉等）、武器・武具（三角板皮綴衝角付冑・襟付短甲・鉄刀・鉄剣等）農耕具、その他鉄器、埴輪など出土した。

三角板皮綴衝角短甲

三角板皮綴衝角兜

短甲出土（中に兜）

（東）



（西）

南側トレンチ

西側トレンチ

三次調査（葺石・土器出土）

現地説明会模様

まとめ

・墳形は前方後方墳である。

・周辺域では確認例はない。

・墳長は 65 ㍍を超え、墳丘の段築は後方部 3 段、前方部 2 段の可能性が高い。

・内部主体部は、木棺直葬をとる。割竹形木棺 1 基、箱形木棺 2 基。

・棺内から多数の副葬品を検出した。

・市域における、過去最大の発掘調査であった。

・今後、これだけの広範な調査は望めない。

参考＊交野車塚古墳群　交野東車塚古墳【調査編】

交野市史【考古編】 交野町史

遺跡を掘っても言葉は残っていない

残らないものは存在しなかったということではない

遺跡から出た情報で仮説を立て、検証することは可能なのである。

次回は 12 月 27 日